

歴史書は語る

ビザンツ帝国一千年の歴史と歴史書



2005 年 4 月 1 日 ~ 5 月 14 日 (日祭日を除く)
東海大学附属図書館
11 号館分館展示室

歴史書は語る - ビザンツ帝国一千年の歴史と歴史書 -

展示にあたって

東海大学附属図書館には 一千点を超すビザンツ帝国関連図書が所蔵されています。そのなかには、わが国では貴重な史料集や研究書、学術雑誌が多数含まれており、いずれもビザンツ帝国に関する研究や教育に欠くことのできない重要な文献です。さらに、バルカン諸国や小アジア・オリエント地域に関する文献を含めた広義の「ビザンツ世界」関連図書は、同図書館の特色あるコレクションのひとつでもあります。これらの図書は、貴重図書や学術雑誌を除いて様々に分類・配架されていますが、最近、史学専攻の大学院生や研修員により図書目録の作成が軌道に乗りつつあり、さらに利用しやすくなることでしょう。

このたび、附属図書館が所蔵するビザンツ帝国関連図書の中から特に重要な図書、約 150 点を選んで展示会「歴史書は語る - ビザンツ帝国一千年の歴史と歴史書」を開催いたします。同展は、文学部歴史学科西洋史専攻が 2005 年度からの新カリキュラム実施に伴い地中海世界の歴史教育を充実・発展させ、さらに本学のビザンツ研究を内外に紹介するために、第 3 回日本ビザンツ学会大会に合わせて附属図書館と共同で企画したものです。

歴史は、史料を語らせる歴史家の問題意識や価値観によって様々に叙述されます。しかし、史料が歴史の原点であることには変わりはありません。本展では、史料としての歴史書を通してビザンツ帝国の歴史の原点に光が当てられます。本展がビザンツ帝国一千年の歴史を理解する一助となることを期待します。本展の実現に際して、これらの文献の収集にあたられた先学諸氏、とりわけ本学名誉教授・尚樹啓太郎先生および解説文を一人で担当した平野智洋研修員、そして協力を賜った関係各位に、心から御礼申し上げます。

文学部歴史学科西洋史専攻
主任教授・金原保夫

序 ビザンツ帝国の歴史と歴史叙述

本展示は、著名なビザンツ人歴史家の著作からビザンツ帝国の歴史的事件を紹介する第1部と、近代ヨーロッパにおいて編纂されたビザンツ史料集と著名なビザンツ史研究者の著作を含む第2部からなっている。第1部では、6世紀の歴史家プロコピオス『戦史』に始まり、11世紀のスキリツィス『歴史概観』、12世紀のアンナ・コムニ『アレクシアス』、13世紀のニキタス・ホニアティス『歴史』、14世紀の『偽コディノスの官職表』、そして、15世紀のハルココンディリス『歴史陳述』の6作品を展示し、重要な歴史的事件を記した部分に翻訳と解説を加えることにより、作品の史料的価値とビザンツ帝国における歴史叙述の伝統が理解できるようになっている。続く第2部では、本図書館が所蔵するビザンツ史料集を刊行順に叢書毎に展示・紹介している。ここには1509年にローマで刊行されたプロコピオスの『戦史』のラテン語訳をはじめとして、「パリ版」、「ヴェネツィア版」、「ボン版」、「ミーニュ版」などと通称される史料全集が展示されている。さらに、デュ・カンジュ、クルムバッハー、ウスペンスキー、ランブロスなどのビザンツ研究者の著書も合わせて展示することによって史料編纂と歴史研究との関係を知ることができる。

つぎに本展の内容に触れながら、ビザンツ帝国の歴史について概観してみよう。ビザンツ帝国は、コンスタンティノープル（旧名ビザンティウム）を首都とするローマ帝国のことであり、東ローマ帝国あるいは中世ローマ帝国などとも呼ばれる。しかし、首都・宗教（キリスト教国家）・文化（ギリシア文化）などが異なることから、古代ローマ帝国と区別して、首都の旧名ビザンティウムに因んでビザンツ帝国と呼ばれている。また、この国家は、4世紀から15世紀に至るまで1千年以上存続した大変長命な国家でもあった。そのため、同国の歴史の全体像を把握することは難しい。そこで、長寿国家「ビザンツ帝国」の歴史を、初期・中期・後期の3つの時代に分けて紹介する。

初期は4世紀から6世紀の時代で、ビザンティウムへの遷都、キリスト教の国教化、専制君主政の確立に始まり、ゲルマン民族の移動によって西部の領土を失うが、6世紀の前半にユスティニアヌス帝により奪回された。しかし、同帝の軍事・建設事業により財政破綻に陥り、重税に対する国民の不満がニカの乱などの市民反乱を招いた。展示図書のプロコピオス『戦史』には、この時のユスティニアヌス帝の置かれた危機的状況と皇后テオドラの女丈夫ぶりがよく描かれている。

7世紀のイラクリオス帝に始まる中期は、1204年に第4回十字軍による首都占領までの約600年に及ぶ時期で、7世紀にはオリエントをイスラーム勢力に、バルカン半島をスラヴ人やブルガリアに占領され衰退したが、聖像破壊運動に伴う混乱が収束した9世紀半ばから回復基調に転じ、マケドニア朝期には全盛期を迎えた。特にヴァシリオス2世は、ブルガリアを征服し、アルメニアから南イタリアに及ぶ領土拡大を果たして中期ビザンツの絶頂期を現出させた。展示されているスキリツィスの『歴史概観』には、ブルガリア征服戦争が凄惨な筆致で記されている。その後、帝国はマンジケルトの戦いでセルジューク朝に敗れ、さらに南イタリアもノルマン人に占領され衰退していくが、アレクシオス1世に始まるコムニノス朝期には勢力を維持することができた。アレクシオス1世の活躍は、展示図書に取り上げた皇女アンナの著作『アレクシアス』において活写されている。しかし、その後は再び勢力が衰え、1204年に第4回十字軍によってコンスタンティノープルが占領され、そこにラテン帝国が建てられた。展示書籍のニキタス・ホニアティス『歴史』は占領に直面した筆者の嘆きが記されている。

13世紀から帝国が滅亡する1453年までが、後期に区分される。1261年にコンスタンティノープルを奪回し、ビザンツ帝国が復活したが、もはやこの時代のビザンツ帝国は、帝国とは名ばかりの小国家に過ぎず、難攻不落の要塞都市コンスタンティノープルによって命脈を保っていた。また、帝国を支えた官僚機構も存続しており、展示文献の『偽コディノスの官職表』は14世紀半ばに属している。しかし、オスマン軍の猛攻撃によって1453年5月29日未明、コンスタンティノープルが陥落し、ビザンツ帝国は滅亡した。このビザンツ帝国最後の時代を記述した歴史書のひとつが展示書籍のハルココンディリスの『歴史陳述』であり、皇帝コンスタンディノス11世の最後の様子を伝えている。（金原保夫）

目次

展示にあたって 1
序 ビザンツ帝国の歴史と歴史叙述 2
1．歴史書は語る 歴史的事件とその記録 4
2．歴史書を作る ビザンツ歴史書編纂の足跡16
3．近代ビザンツ史学の確立と発展30
付記・執筆者紹介36

(1) 「帝衣は最高の死装束」 市民の反乱と皇后の言葉(532 年)



・原著者 プロコピオス(Prokopios/ Προκοπιος, 500?-562?)

No. 2 **Prokopios[Procopius Caesariensis]**, Procopii Cæsariensis Arcana historia : qui est liber nonus Historiarum. Ex Bibliotheca vaticana Nicolaus Alemannus protulit, Latinè reddidit, notis illustravit, Lvgdvni, Sumpt. Andreae Brugiotti, M.DC.XXIII[1623], [12], xxiii, 135, 142, [17]p., illus., 31cm.

「帝衣は最高の死装束」 市民の反乱と皇后の言葉(532 年)

コンスタンティノーブル競馬場跡

(テオドシウス 2 世のオベリスク)

皇后テオドラ

(ラヴェンナ・サン・ヴィターレ聖堂モザイク)

皇帝の傍らにあった者達は、留まるのがよいか或いは留まらずに船にて逃走に転ずるのがよいかと協議していた。そしてそれぞれについて支持する多くの意見が述べ立てられた。そして皇后テオドラはこの様に述べた。「女は殿方の内にて敢えてであれ或いはためらいの内にてであれ不敵な振る舞いをしてはならぬなどという事は、今この危機に於いては、この方法あの方法で考えるべしなどと議論する事は全く許されはしないと考えます。と申しますのも事態を最も大きな危険へと向かわす者共には、目前の事を最善の事とする以上に最善と考えるものは無いからです。そこで私の意見は、何よりも、逃げるという事はたとえ今、身の安寧をもたらすにせよ無益な事というものです。光の許に出でた人間が死者となる事もまた不可能ではあり得ないと同時に、皇帝であった者にとって亡命者となる事は耐え難い事であるからです。なればこの紫衣なく生きる事のありませぬよう、出会う者達が私を皇后陛下と挨拶しないような、そのような日々を生きる事のありませぬよう。さてもし御身を保つ事をお望みならば、皇帝陛下、それは難題ではありませぬ。我々の許には多額の金があります、そこには海、あちらには船があります。なれど良くお考え下さい、無事安寧を死と引き替えて首尾良く生き延びたといたしまして、それが陛下にとって快事とはならないのではないかと。私めにとりましては、帝衣は最高の死装束であるという、さる古^{いにしへ}の言葉で十分です」……

(プロコピオス『戦史』第 1 巻 24 節より)

・解説

「東西ローマ帝国の統一と復興」という高邁な理想を掲げて登場したユスティニアヌス帝は、その実現の為に戦争・建築などの諸事業に積極的に乗り出した。しかしそれは当時の帝国の財務能力を超えた行いであり、結局その負担は増税・重税という形で民衆にのしかかってきた。不満を募らせた民衆、首都市民達は当時の国家的行事の一つ、戦車競技に乗じて皇帝に対する反乱をおこし、反対皇帝を擁立するに至る。劣勢を悟ったユスティニアヌス帝と従臣達は首都からの逃亡を決意するが、これに反対して皇后テオドラが放ったのが上の言葉である。彼女の一言を機に皇帝達は気力を取り戻して反撃に成功し、反乱を鎮圧する。この言葉が本当に彼女のものであるかどうかは分からないが、勝ち気の皇后の姿を見事に描き出している。「登場人物をして語らしめる」トゥキュディデス式の叙述方法をとったプロコピオスの面目躍如といった状況描写である。

(2) 「ブルガリア人殺し皇帝」 ヴァシリオス 2 世の征服戦争(1014 年)



No. 3 『歴史概観』 (Synopsis istorion/ Συνοψις ιστοριων)

・原著者 ヨアニス・スキリツィス (Ioannes Skylitzes/ Ιωαννης Σκυλιτζης, 11 世紀) / ゲオルギオス・ケドリノス (Georgios Kedrenos/ Γεωργιος Κεδρηνος, 12 世紀)

スキリツィスは 11 世紀の歴史家で、クロパラティス爵位及び宮殿警護隊長職を保有。著作はセオファニス年代記の続編で 811-1057 年を扱い、特にビザンツの全盛期を作り出した「ブルガリア人殺し皇帝」ヴァシリオス 2 世 (976-1025) の業績を生々しく記している。ゲオルギオス・ケドリノスは 12 世紀の歴史家。著作は天地創造から 1057 年までを扱う、セオファニス年代記を含めた様々な歴史書からの編纂物。特に 811-1057 年間の記録はスキリツィス著作の丸写しであり、前者が 1973 年に単独で校訂出版されるまではスキリツィス著作の代替として読まれていた。図版はパリ版のもので前半部分をケドリノス著作、後半部分をスキリツィス著作 = 「続スキリツィス」として編集してある。

No. 3 **Georgios Kedrenos; Ioannes Skylitzes, Kouropalates**, Γεωργίου του Κεδρηνοῦ Συνοψις ιστοριων = Georgij Cedreni Compendium historiarum, ex versione Guillelmi Xylandri, cum eiusdem annotationibus, accedunt huic editioni præter lacunas tres ingentes, & alias expletas, notæ in Cedrenum P. Iacobi Goar, Ord. Prædicator. & Caroli Annibalis Fabroti I.C. glossarium ad eundem Cedrenum: Ioannes Scylitzes Curopalates, excipiens vbi Cedrenus desinit, nunc primvm Græcæ, editus, ex Bibliotheca Regia, Parisiis[Paris], E Typographia Regia, 1647 (Byzantinæ historiæ scriptores varii), 2v. [68], 868, 60, [54]p., 44cm.(fol.)

「ブルガリア人殺し皇帝」 ヴァシリオス 2 世の征服戦争(1014 年)

異民族を足下に引き据える
ヴァシリオス 2 世
「ブルガリア人殺し皇帝」

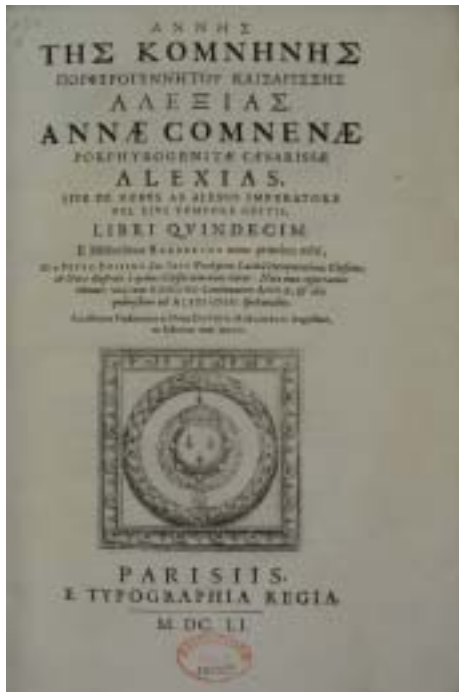
ブルガリア軍を敗退させる
ビザンツ軍（上）
病に倒れたサムイル帝と捕虜（下）

皇帝 [ヴァシリオス 2 世] はブルガリア人のうち一万五千人ほどを捕虜としたが、伝えられるところでは、何千人と目潰しにし、そして不慮にされた者達の内百人ごとに一つ目にされた者に道案内を受けるよう命じてサムイルの許に送り届けた。彼 [サムイル] は戻ってきた彼らの数と列とを目にして、感情が活力もなく果敢さも示さなくなり、意気阻喪と暗転に放り込まれそして地に倒れてしまった。近侍の者達が水と香油によって彼に息を呼び戻させ、短く報告を行った。報告を受けた彼は冷水を飲む事を求めた。受け取って飲んだ彼は心臓の苦しみに陥りそして二日後に死去した。

（スキリツィス『歴史概観』「ヴァシリオス及びコンスタンディノスの治世」第 35 章より）

・解説 ビザンツ帝国の全盛期を演出したヴァシリオス 2 世は鉄の意志を持つ将軍皇帝であった。彼の治世は征服戦争の勝利によって彩られている。それは血の色である。彼は呵責無い態度で帝国北西に拠る西ブルガリア（マケドニア）帝国のサムイル帝(990-1014) に対する戦争を遂行し、これを滅ぼして併合した(1018 年)。引用はサムイル帝最後の戦いとなったベラシツアの会戦(1014 年)である。その激烈を極める戦闘と過酷なまでの措置は、彼に「ブルガリア人殺し」の二つ名を帯びさせた。ビザンツ史家スキリツィスもまた鼻白みつつもこの戦争を鮮やかな筆で描き出す。

(3) 父は偉大な皇帝 娘が語る皇帝像



No. 4 『アレクシアス』 (Alexias/ Αλεξιας)

・原著者 アンナ・コムニニ(Anna Komnene/ Αννα Κομνηνη, 1083-1148?)

ビザンツ中興の祖アレクシオス1世コムニノス帝(1081-1118)の長女。当時のビザンツの実力者で名門出身のニキフォロス・ヴリエニオスと結婚。父の死に際し弟ヨアニス二世・コムニノス(1118-43)を退けて夫を帝位につけようと画策するが失敗、修道院に隠退させられる。

(著作紹介) 全15巻、1148年頃完成。故アレクシオス1世の妻、皇太后イリニ・ドゥケナの依頼により彼の伝記を執筆中であった夫ニキフォロスの死によりその遺志を継いで父の治世を記録。父アレクシオスを尊敬して止まないアンナの筆は彼を理想的君主として描き出す。同時代の十字軍に対しては不信感をにじませており、当時のビザンツ人の価値観を知る上でも良い史料である。なお、表題の『アレクシアス』は古代ギリシアの叙事詩『イリアス』を意識してつけられており、この点でもアンナが如何に父アレクシオスの人物と業績を偉大なものとして捉えようとしていたかが窺われる。展示の書籍はバルベリナ図書館蔵の写本をもとにペトルス・ポッシヌスが編集したパリ版のもの。

No. 4 **Anna Komnene**, Annæ Comnenæ ... Alexias, sive de rebus ab Alexio imperatore vel eius tempore gestis libri quindecim, e Bibliotheca Barberina nunc primum editi et à Petro Possino... , Parisiis[Paris], E Typographia Regia, 1651, xiv, 507, liii p., 44 cm.

父は偉大な皇帝 娘が語る皇帝像

.....私はこれら所業を、文学に於ける私の熟練を示す為ではなく、この様な重要事の事物が未来の世代に証言されぬままに放置される事の無いよう、述べるのである。所業の中でも最も偉大なものについてさえ、もし書かれた言葉で偶然にも保存されず記憶へと伝えられなければ、沈黙の闇へと消し去られてしまうであろう。さて、私の父は、実際の行動が示すように、いかに命じ、またいかに妥当な範囲で君主に従うかの双方を知っていた。そして私が彼の行為を叙述する事を選んだとはいえ、なお私は疑惑と中傷の言葉が私の父の歴史が単なる自画自賛であると、そして歴史的事実と、それらに与えるいかなる称賛も単なる誤りと空疎な賛美であると囁く事になるのではと恐れている.....

アレクシオス1世コムニノス帝像

.....あまりに偉大で徳のある皇帝の人生の公刊は、彼の驚くべき業績を想起させるであろう、そしてこれらは私に、暖かな涙を溢れさせよう、そして全世界が私と共に涙するであろう。彼を思い起こす事は、そして彼の治世を知られるようにする事は私にとっては嘆かわしい主題であるが、しかし彼らが保ってきた喪失を他のものに思い起こさせるであろう。さて、私は我が父の歴史をある決定的な時点から始めねばならない、そして最善の時点とはそこから私の叙述が完全に明確になり、事実可依拠し得るところという事になるだろう。
(『アレクシアス』序文より)

・解説

平安時代の我が国同様、中期ビザンツ帝国は才ある女流文人を生み出した。皇帝アレクシオス1世の長女として生まれたアンナは自らの歴史書の序文でホメロスの文法を自家薬籠中のものにすると告白する。そして偉大な父の伝記を公にする事の意義を語る。しかしそれが女だてらに才女ぶった行為に、また親族なるが故の身びいきと見られかねないその難しさを語る。そしてそれは彼女が初めから自分で選び取った道ではなかった。本来はもっとそれに相応しいと誰もが認めたという夫ニキフォロスの死。父の伝記を記すという事は、彼女にとっては二人の愛すべき人物の死と共にある事であると、彼女は涙ながらに語る。しかしそれでも彼女は決然と続ける。父を描く事で失ったものを埋めていくという事。様々な思いが詰まった歴史の扉を開けていく、その場に立つ女流歴史家の決意がここにはある。

(4) おお帝都よ 第4回十字軍とビザンツ人の嘆き



No. 5 『歴史』 (Istoria/ Ιστορία)

・原著者 ニキタス・ホニアティス・アコミナトス (Niketas Choniates Akominatos/ Νικήτας Χωνιάτης Ακωμινάτος, 1155/57 頃-1217)

小アジア出身のビザンツ高級官僚。兄ミハイルはアテネ府主教。アコミナトスという名前は誤ってつけられた添え名であると言われている。1182 年から官界に入り、イサアキオス二世アンゲロス帝(1185-95)の時代に文官最高位の國務長官職に就く。1204 年の第4回十字軍コンスタンティノーブル占領に直面し辛うじて親族共々小アジア・ニケアに脱出。

『歴史』は彼の主著であり 1118-1206 年間、特に 1176 年以降の最も重要な記録となっている。展示の書籍はヒエロニムス・ヴォルフによる初版本をそのまま再録したパリ版のもの(解説は 16 ページ参照)。

No. 5 **Niketas Choniates Akominatos**, *Nicetæ Acominati Choniatæ historia*, Hieronymo Wolfio Ostingesi interprete, Parisiis[Paris], E. Typographia regia, 1647. (Byzantinæ historiæ scriptores varii), 464 p., 43 cm.

おお帝都よ 第4回十字軍とビザンツ人の嘆き(1204年)

ニキタス・ホニアティス肖像

コンスタンティノーブルの栄華をしのばせる
聖ソフィア聖堂(現トルコ・イスタンブール)

おお帝都よ、帝都、あらゆる都市の中でも最も素晴らしきもの、全世界に響く名声、この世を超えた景観、教会の乳母、信仰の長、正教会の導き手、学芸の庇護者、あらゆる美の留まる場所よ！ おお主の御手から生命を飲む杯、巻き起こり、多くの者に古の五都市の大火よりも激しく下されたる大火。「そなたに何を証言しよう？ 私は何をもってそなたになぞらえよう？ そなたの破滅の杯が掲げられたという事を」……

(ニキタス・ホニアティス『歴史』より)

・解説

ホニアティス著作のクライマックス・シーンである。11世紀に起きた世界史上の転換の一つ、トルコ人の西進はビザンツ帝国への侵入と十字軍の誕生を生み出した。しかし「イスラームに対する聖戦」は寧ろ東西キリスト教会の相違と不和を確認・助長する結果となった。十字軍は遠い聖地よりも近くの大國ビザンツにその野望を向けていく。東地中海世界の覇権を狙うヴェネツィアの主導下に展開された第4回十字軍(1202-04)はコンスタンティノーブルに迫るが、破局を引き起こしたのは政争の道具に十字軍を引き込んだビザンツ政治家達であった。その代償はとてつもなく大きかった。栄光をほしいままにした首都コンスタンティノーブルは今や彼らが軽蔑し続けてきた「蛮族」の土足に踏みにじられていく。ホニアティスの嘆きは、過去の栄光の美しさ、そして失ったものの大きさを人々に訴えて止まない。そして失われた栄光と輝きは二度と取り戻される事はなかった。「世界唯一のローマ帝国」は1204年のこの時、確かにその役割を終えていたのである。

(5) ビザンツ帝国の官職制度 『偽コディノスの官職表』(14 世紀)



No. 6 『至賢なるクロパラティスのコンスタンティノーブル宮廷の諸官職及び大教会の諸官職について』(Του σοφωτατου Κουροπαλατου περι των οφφικιων του παλατιου Κωνσταντινουπολεως και των οφφικιων της μεγαλης εκκλησιας)

・著者と著作について

クロパラティスなる宮廷名誉職を保有する人物によって書かれた後期ビザンツ宮廷及び教会の諸役職に関する記述が古くから知られていた。その著者についてはかつてゲオルギオス・コディノス(Georgios Kodinos/ Γεωργιος Κωδινος)なる人物が同定されていた。しかしこの著作は14世紀半ばのものであり、コディノスには別にビザンツ帝国の滅亡について記した比較的短編の年代記が残されていたことから、官職関連の著作は彼の名前を冠した偽作である事が判明し「偽コディノス」という名称が一般化した。展示の書籍はヤコブス・グレッツェル校訂・編纂のパリ版のものである。グレッツェルの校訂及び解説はその後この著作に関する第一のものとしてボン版、ミーニュ版に再録される事となった。

No. 6 **Georgios Kodinos Kouropalates[Pseudo-Kodinos]**, Georgivs Codinvs, cvropalata, De officiis magnæ ecclesiæ, et avlæ Constantinopolitanæ, ex versione P. Iacobi Gretseri, cum eiusdem in codinum commentariis, libristibus & de imaginibus non manufactis opere ; in hac editione præter comparatum cum regiis MMSS. Græcum textum, & reparatam latinam versionem, accedunt inediti ex Regia & mazarina bibliotheca officialium catalogi & ad codini mentem locupletes nota; adiunguntur recentiores Orientalium episcopatum notitiæ, voces honorariæ, appellationes dignitatum indices, quibus post, Parisiis[Paris], E Typographia Regia, 1648, 422p., 45cm.

ビザンツ帝国の官職制度 『偽コディノスの官職表』(14世紀)

正装したビザンツ高官(15世紀) 後期ビザンツ宮殿の一つ、ミストラス宮殿
(南ギリシア・ペロポネソス半島)

^{デスボティス}専制公。皇帝の皇子たる専制公は、皇帝の兄弟、そして婿たる同じ諸専制公より前置されて記される。

^{セヴァストクラトル}尊厳公。皇帝アレクシオス・コムニノスの時まで、尊厳公の位階はなく、皇帝のすぐ後、全ての第一位は^{ケサル}副帝であった。これはニキフォロス・メリシノスに副帝の位階を叙した後、彼[アレクシオス]によりその長兄イサアキオス・コムニノスはその時、より大いなる位階によって遇さるるところが、その位階がなく、^{ケサル}副帝を除いて新たなる位階を命名創設し、「尊厳者」と「^{メガスティコス}元首」とにより合成し、「尊厳者たる元首」と明示して兄に適用し、これを第二の皇帝の如く仕立て上げ、^{ケサル}副帝を引き下げ、そして皇帝に次ぐ名誉を公示し、数え上げたのである。

^{ケサル}副帝。
^{ドメスティコス}帝国軍総司令官。

^{パニベルセヴァストス}最高位尊厳侯。これもまたかつては存在しなかったが、同じくアレクシオス帝が案出した。……

(通称『偽コディノスの官職表』第二章「帝都コンスタンディヌポリス宮廷の官職の名称に関して」より)

(解説) ビザンツ帝国は西欧と異なり中央官僚制が発達し、様々な部局が縦割りの官職機構により支えられていた。一方、宮廷儀式などの席次については厳密なしきたりがあり、主にそれは爵位による身分体系からなっていた。官職・爵位制度共に時代の推移と共に変化していくが、その時代ごとに作成された手引き書・官職表の如きものが現存しており、我々は官職の種類と職能から宮廷儀礼に於ける服装や席次に至るまでの詳細を知る事が出来る。「偽コディノス」は官職表の中でも最も後期のものに属する。古い時代への憧憬からか、既に使用されなくなって久しい官職・爵位称号がその起源についての説明と共に多数記載されている。同時代の実用書としては無用の情報も多く、ある意味では時代の要請とやや離れていると言えるが、それでもこの時代の制度史に関する数少ない史料である。

(6) コンスタンティノープル陥落す ビザンツ帝国の滅亡(1453 年)



No. 7 『歴史陳述』 (Apodeixeis istorion/ Αποδείξεις ιστοριων/ 全十巻)

・ 原著者 ラオニコス・ハルココンディリス (Laonikos Chalkokondyles/ Λαονικος Χαλκοκονδυλης, 1423-1490 頃)

アテネ出身の歴史家。フィレンツェ貴族支配下の故郷アテネにおける政争を逃れてオスマン帝国、ビザンツ帝国の宮廷を転々とする。ビザンツ末期の哲学者ゲミストス・プリソンの弟子としてミストラスで学び、歴史書を執筆。

(著作紹介) オスマン・トルコ帝国の伸張に関心を持つ著者がその起源から書き起こし 1298-1463 年の歴史を記す(若干の事件記録は 1480 年代に及ぶ)。古代のヘロドトスに範をとる彼の作風は文体上は非常に擬古典的色彩に満ち、ビザンツ帝国とオスマン帝国の関係を古代のペルシア戦争、ギリシアとペルシアの対決に対比している。彼にとって「皇帝」(basileus)はもはやビザンツ皇帝ではなくオスマン朝のスルタンであり、ビザンツ皇帝は「ローマ人の皇帝」ではなく「ギリシア人の皇帝」(basileus Ellenon)である。また「物語的歴史書」としての側面も持ち、歴史叙述の本筋を離れて西欧、アフリカ、アジアの地誌をも紹介している。直接ではないが、中国を中心に恐らくは日本を含む東「アジア諸国」についても言及する後期ビザンツ唯一の歴史書でもある。展示の書籍は J. B. バウムバッハ編集でハルココンディリス著作の初版(editio princeps)となる。他二作品収録。

No. 7 **Laonikos Chalkokondyles; Nikephoros Gregoras; Georgios Akropolites**, *Historiae byzantinae scriptores tres graeco-latini uno tomo simul nunc editi*: I. Nicephori Gregoræ, *Romanæ hoc est byzantinae historiae libri XI. quibus res a græcis imperatoribus per annos CXLV ... describuntur, & Nicetæ Acominati Choniatae ... suppleuntur*: II. Laonici Chalcocondylæ *Atheniensis Historia de origine ac rebus gestis imperatorum turcicorum ... e tribus Bibliothecæ palatinae manuscriptis codicibus nunc primum græce edita & emendata*: III. Georgii Logothetæ *Acropolitæ Chronicon Constantinopolitanum ...*, Accesser, Coloniae Allobrogum[Köln], apud Petrum de la Rouiere, 1615, 2 pts. in 1 v., 34 cm.

コンスタンティノーブル陥落す ビザンツ帝国の滅亡(1453 年)

コンスタンティノーブル城壁

ビザンツ最後の皇帝
コンスタンディノス 11 世
パレオロゴス帝 (在位 1449-53 年)
(ギリシア・ミストラス市にある廟墓・彫像)

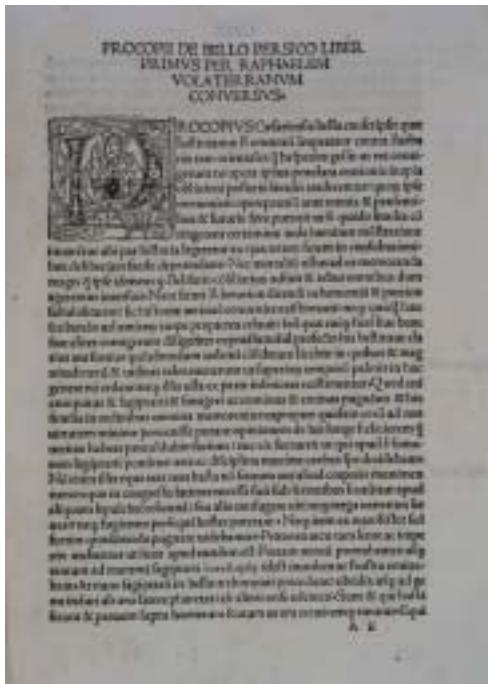
……皇帝 [コンスタンディノス 11 世] 自身はカンダクジノス [ビザンツ武将] とその側にいた僅か数名の者達に向かって言った。「者共、あの蛮族共に向かっていざ進まん！」この高貴で勇敢なカンダクジノスは斃れた。そしてコンスタンディノス帝が身を翻すと、後に続き追ってきた者達が皇帝の肩に傷を負わせ、そして彼もまた斃れた。……

(ハルココンディリス『歴史陳述』第八巻(左頁右写真)より)

・解説

1261 年に再興されたビザンツ帝国はエーゲ海沿岸の小国として衰退と縮小の歴史を歩み、最後に残されたのは陸の孤島と化したコンスタンティノーブルと遠く離れたペロポネソス半島のみであった。若く野心的なスルタン・メフメト 2 世率いるオスマン帝国は 1453 年春、コンスタンティノーブル周辺の海上を封鎖し大兵力と新兵器・大砲の威力を持ってコンスタンティノーブルを包囲攻撃した。孤立無援の状態で戦い続けたビザンツ帝国防衛軍は 60 日近い包囲戦の後力尽き、5 月 29 日、難攻不落を謳われたコンスタンティノーブルの城壁は突破されて市は陥落した。最後の皇帝コンスタンディノス 11 世は乱戦の最中に姿を消し、二度と戻らなかった。この日、一千年もの歴史を綴ったビザンツ帝国は地上から消滅したのである。ハルココンディリスは事件の目撃者ではなかったが、伝聞をもとにした彼の筆は、その最後の様子を劇的に描き出している。

2. 歴史書を作る ビザンツ歴史書編纂の足跡 (1) ヒエロニムス・ヴォルフ以前



西欧のビザンツ世界への関心はルネサンスによって啓発された古典ギリシア・ローマへの関心とオスマン帝国に対する脅威から強まった。ビザンツ歴史書への接近は何よりも旧ビザンツ世界に最も近く亡命者が多数定住したイタリアにて始まった。すでに亡命ギリシア人達によってギリシア語の文法書や辞書が作られ、少しずつギリシア語知識取得の環境は整えられていたが、まだこの頃には歴史書原典を扱う事の出来る学者は多くはなく彼らの関心は殆どが古典に向けられていた。従って、ビザンツ史の知識を得ようとする者はさしあたり翻訳を手にする他無かった。展示の二書籍はこうした時代の産物である。

(左) No. 9 プロコピオス『戦史』

東海大学図書館蔵のものとしては最古のビザンツ文献である。ラファエル・ヴォラテラヌスによるラテン語訳。簡単な巻頭言の他には注釈・解題などはない。1509 年ローマにて刊行された。

No. 9 Prokopios[Procopius Caesariensis], De bello Persico, liber primus - quartus, per Raphaelem Volateranum conversus, Rome Eucharius Silber, 1509, Folio, [90, 134]: 1., 28cm.

(右) No. 10 ニキタス・ホニアティス『歴史』/ニキフォロス・グリゴラス『ローマ史』

ロドヴィゴ・ドルチェによる二著作のイタリア語訳。ラテン語ではなく当時の俗語であるイタリア語への翻訳は画期的な仕事と言えるが、残念ながらギリシア語テキスト(アゴスティノ・フェレンティツリ校訂)は未収録。1569 年ヴェネツィアにて刊行。

No. 10 Niketas Choniates Akominatos; Nikephoros Gregoras, Historia de gl' imperatori Greci: descritta de Niceta Coniate. Alla quale s'e aggivnta l'Historia de Niceforo Gregoro. Amendve tradotte da m. Lodovico Dolce, et riscontrate co' testi Greci, & migliorate de m. Agostino Ferentilli, Vinetia[Venezia], Gabriel Giolito de Ferrarii, 1569, 3 v. in 1., 22 cm

(2) ヒエロニムス・ヴォルフによる最初のビザンツ歴史書出版と個別の編纂



・編者 ヒエロニムス・ヴォルフ (Hieronymus Wolf, 1516-80)

ルネサンスの人文主義者メランヒトンの弟子で、デモステネスなど古典弁論家の著作研究を本業としていた。神聖ローマ帝国（ハプスブルク王朝）や教皇庁に多額の融資を行い、免罪符の販売を請け負っていた事で知られるドイツ・アウグスブルクの豪商フッガー家の秘書で、当主アントン・フッガーの助力を得てニキタス・ホニアティス、ヨアニス・ゾナラス、及びニキフォロス・グリゴラス著作の一部を刊行した。ちなみに、「ビザンツ」という名称をこの帝国に宛て、独自の研究対象として確立したのはヴォルフが初めてであったと言われる。

No. 5 ニキタス・ホニアティス・アコミナトス『歴史』

10 ページのものと同一。これはヴォルフ生前のものではなく彼の死後刊行されたパリ版に再録されたもの。

No. 5 **Niketas Choniates Akominatos**, *Nicetae Acominati Choniatae historia*, Hieronymo Wolfio Ostingesi interprete, Parisiis[Paris], E. Typographia regia, 1647. (*Byzantinæ historiae scriptores varii*), 464 p., 43 cm.

「裏話」……アントン・フッガーの「助力」とは？

「ヴォルフがビザンツ人歴史家編纂に付した序文の中で述べている事以上に重要なのは、彼がその自伝中で漏らしている言葉である。それによれば、彼はこの編纂の仕事を、アントン・フッガーに対する恐怖から続けたのであって、フッガーはヴォルフの嫌気を認めるや、面と向かって、フッガー家の為にもう仕事をして呉れなくて結構、と云ったという。ヴォルフは確かにビザンツ人作家に対し、熱中などしなかった。そうでありながら他方、デモステネス編纂も、イソクラテス編纂も、彼に何らの財政的助けともならず、その点、『私の金銭的支えとなったのは、ビザンツ史料集であった』という」



ヴォルフの活動に刺激を受けて、いくつかの歴史書が注釈・解題と翻訳を伴い刊行され始めた。これらはいずれも従前のものに比べて学術的な水準を持つようになってきた。

(左) No. 11 『歴史概観』 (Synopsis istorie/ Συνοψις ιστοριη)

・原著者 コンスタンディノス・マナシス (Konstantinos Manasses/ Κωνσταντίνος Μανασσης, 1130-1187 頃)

宮廷作家、ナフパクトス（レパント）府主教。宮廷に於いて皇帝や貴族への称賛詩、恋愛物語詩などの詩作を多数記す。更にその詩才を以て『歴史概観』を著し、韻文による年代記という新たな一分野を開拓する。同書はアダムの時代から 1081 年までを扱っている。俗語版など多数の異本が作られた他、14 世紀にブルガリア語に翻訳され、現存するその写本には多くの挿絵が含まれている事でも知られている。展示の書籍は東洋学者ヨハンネス・レウクラウィウス(1541-94)によるラテン語訳でバーゼルにて 1573 年刊行。

No. 11 **Konstantinos Manasses**, Annales Constantini Manassis : Nunc primū in lucem prolati, & de Græcis Latini facti, per Iohannem Leuvenclaium. Ex Iohannis Sambuci V.C. Bibliotheca, Basileæ[Basel], Ex Officina Episcopiana, 1573, 176 p., 18 cm

(右) No. 12 『ユスティニアヌス帝の統治について』 (Peri tes Ioustinianou basileias/ Περι της Ιουστινιανου βασιλειας)

・原著者 アガシアス(Agathias/ Αγαθιας, 536 頃-582)

小アジア出身の弁護士。詩人としても活動しいくつかの詩が詞華集に収められる。『歴史』はプロコピオスの続編を志して書かれたが途中で著者が死去し途絶。展示の書籍はヴルカニウス編纂のものでリヨンにて 1594 年に刊行されたもの。

No. 12 **Agathias**, Agathiæ, historici & poetæ eximij, de imperio et rebus gestis Iustiniani Imperatoris, libri quinque : Græcæ nunquam antehac editi. ex bibliotheca & interpretatione, Bonaventuræ Vulcanii ; accesserunt eiusdem Agathiæ epigrammata Græca, Lygduni Batavorum, Ex Officina Plantiniana, apud Franciscum Raphelengium, 1594, 2v. in 1, 25 cm.



No. 13 『戦術教書』(Taktika/ Τακτικά)

・ 原著者 コンスタンディノス 7 世 ポルフィロゲニトス (Konstantinos VII. Porphyrogennetos/ Κωνσταντίνος VII. Πορφυρογεννητος, 905-959)

ビザンツ皇帝(913-959)。「ポルフィロゲニトス」とは「緋色の産室生まれ」という意味を持つ尊称であり、生まれながらの皇子として高い尊敬を受け、以後代々の皇子達が帯びた。幼少時に父、叔父が相次いで死去したため即位するが実権は岳父ロマノス 1 世・レカピノス(920-944)が掌握。945 年に実権を回復するが政務よりも学芸の保護や古典作品の収集に努め、「マケドニア朝ルネサンス」と呼ばれるビザンツ中期知的復興の中心人物となる。彼自身多数の著作を残す。展示の書籍はヨハネス・メウルシウスによる編纂で表題の著作の他『セマについて』(Peri ton thematon/ Περί των θεμάτων)やその他の小品集を収録しパリにて 1617 年刊行。

No. 13 **Konstantinos VII. Porphyrogennetos**, Constantini Porphyrogenetae imperatoris opuscula in quibus Tactica nunc primum prodeunt, Ioannes Meursius, collegit, coniunxit, edidit, Lugdvni Batavorum, ex officinâ Elzeviriana, 1617, 307 p., 19 cm.

(3) Nos. 14-18 『ビザンツ史家全集パリ叢書』(通称「パリ版」、ないし「ルーヴル版」/ Corpus Scriptorum Historiae Byzantinae, Parisiis, 1648-1711, 34 vols)



全集として初めて刊行されたビザンツ歴史書集。この刊行事業は仏王ルイ 14 世の統治下、蔵相コルベールの後援を得てイエズス会士フィリップ・ラップ(1607-67)主宰下に行われた。シャルル・デュ・カンジュ・デュフレソンら当代の碩学が参加協力。以降のビザンツ史料全集の定番スタイルとして、希羅対訳の形式が取られたが、このラテン語訳は「場所によっては全く不十分な、意識以上のラテン訳」と評される質のものであり、この問題は続くヴェネツィア版、ボン版、ミーニュ版にも引き継がれた。それでも「ギリシア語は存す、しかれども読めず」(*Graeca sunt, non leguntur*)という風潮もあって多くの研究者がこのラテン語訳を用いていたという。なお、有名な『ローマ帝国衰亡史』の著者エドワード・ギボンもその執筆にあたり史料としてこのパリ版を用いたと思われる。

No. 14 『歴史書』(Istorion biblia/ Ιστοριων βιβλια)

・原著者 ヨアニス 6 世カンダクジノス(Ioannes VI. Kantakouzenos/ Ιωαννης VI. Καντακουζηνος, 1295-1383)

ビザンツ皇帝(1347-54)。有力貴族の出身でアンドロニコス 3 世(1328-41)の友人として同帝の即位と統治を助力。第 4 回十字軍以降失われていた西部ギリシアを併合。同帝死後幼帝ヨアニス 5 世(1341-91)の摂政権を主張して逆に追放されると皇帝を宣言し、内乱を引き起こす。オスマン・トルコの君侯オルハンの助力により内乱に勝利し皇帝となるが一方でトルコのバルカン進出の契機を与える結果となる。また自分の息子を後継者に据えるなどの行為により人心が離反、退位と修道院入りを余儀なくされる。彼はまた静寂主義の熱心な信奉者であり、神学者・聖グリゴリオス・パラマスと協力してこれを正統信仰に決定した。

(著作紹介) 『歴史書』(全 4 巻)は退位後に書かれ、1320-57 年に至る自身の政治生活を回顧している。当事者である分知識は豊富で正確であるが、極めて自己弁護の性格が強く客観性はあまり期待出来ない。パリ版シリーズの第 19 巻(当初の予定では第 22 巻)。編纂にはヤコブス・ポンタヌスあたり、解説をヤコブス・グレッツェルが行っている。なおグレッツェルの解説はそのままヴェネツィア版、ボン版、ミーニュ版にも収録された。

No. 14 **Ioannes VI. Kantakouzenos**, Ἰωαννου του Καντακουζηνου αποβασιλεως Ἱστοριων βιβλια Δ.= Ioannis Cantacuzeni eximperatoris Historiarum libri IV, Iacobus Pontanus ... vertit, & notas suas cum Iacobi Gretseri adnotationibus addidit .., Parisiis[Paris], E typographia regia, 1645 (Corpus scriptorum historiae byzantinae; v. 19), xxvi, 1058, xlviii p., 43 cm.



創刊号。刊行予定の歴史書一覧がカタログとして収録されていた。この中にはゲオルギオス・フランツィスのように刊行が実現しなかったものも若干存在する。従って当初につけられていた巻号と実際に刊行されたものの巻号は若干異なる。この創刊号は主催者フィリップ・ラップ自身が編集を担当し、初期ビザンツ著作家の断片集を収録した。なお、展示の書籍にはシリーズ第4巻となるセオフィラクトス・シモカティスが合本されている。

No. 15 **Philippe Labbe(ed.)**, De Byzantinae historiae scriptoribus, sub felicissimis Lvdovici XIV ... Eclogæ historicorum de rebus Byzantinis ..., Parisiis, e typographia Regia, 1648, 59, 111p., 42 cm; **Theophylaktos Simokattes**, Theophylacti Simocattæ historiarum, Mauricij Imperatoris res gestas libris octo, Græco-latine emittimus, iuxta editionem Ingolsiadiensem anni 1604. 2 R. P. Iacobo Pontane Societatis Iesv, cum versione Notisque procuratam, cui nunc a se recognitæ Carolus Annibal Fabrotus IC. multipuli eruditione celeberrimus Glossarium adiecit, Parisiis, e typographia Regia, 1648, 42cm.

「歴史書は語る」のハルココンディリス著作(14 ページ)と並んで展示されているのはレウクラウィウスによる詳細なオスマン史を付した同著作のパリ版である。

No. 8 **Laonikos Chalkokondyles**, ... Laonici Chacocondylæ Atheniensis Historiarum libri decem, Interprete Conrado Clausero Tigurino, Cum annalibus sultanorum, ex interpretatione Ioannis Leunclavii, Accessit index glossarum Laonici Chalcocondylæ, studio & operæ Caroli Annibalis Fabroti IC, Parisiis[Paris], E typographia regia, 1650 (Byzantinae historiae scriptores varii, t. 22.), vii, 506, xxviii[28]p., 43cm.



No. 16 『年代記』 (Chronographia/ Χρονογραφία)

・原著者 修道士ゲオルギオス (Georgios Monachos, Synkellos/
Γεωργιος Μοναχος, συγκελλος)

修道士。イコン〔聖像〕破壊反対運動に尽力。宗教的謙譲から自ら「罪深き者」と称す。世界創造からイコン擁護派の勝利へと至る年代記を著す。スラヴ語に翻訳され、特にロシア文学に影響を与えた。原題は『^{アマルトロス}収集され組み合わせられた様々な年代記と注釈よりの抜粋 年 代 記』

(Χρονικον συντομον εκ διαφορων χρονογραφων τε και εξηγητων συλλεγεν και συντεθεν)であるがここでは単に『年代記』と略されている。

同時収録『歴史要約』 (Epitome istorion/ Επιτομη ιστοριων)

・原著者 総主教ニキフォロス 1 世 (Nikephoros I, patriarches/
Νικηφορος, πατριαρχεις)

総主教在位 806-815 年。同名の皇帝ニキフォロス 1 世により、俗人の身で総主教に任命され、急進派修道士と対立。ニキフォロス帝がブルガリア遠征で戦死した後和平条約に批准。次の皇帝レオン 5 世のイコン破壊運動に反対して廃位される。神学・世俗学問に通じイコン擁護派の立場でいくつもの著作を記すが、『歴史要約』もその一つで 602-769 年を扱う。展示の書籍はヤコブス・ゴアルによる編纂。

No. 16 Georgios Monachos, Synkellos; Nikephoros, patriarches, Γεωργιου Μοναχου ... Χρονογραφία ... = Georgii monachi et S.P.N. tarasii patriarchæ Cp. quondam Syncelli chronographia, ab Adamo vsque ad Diocletianum, et Nicephori Patriarchæ Cp. Breviarium chronographicum, ab Adamo ad Michaelis & eius F. Theophili tempora, Georgius Syncellus è bibliotheca regia nunc primum, adiecta versione Latina, editus, Nicephori Breuiarium ad varias editiones recensitum, his Tabulæ chronologicæ & annotationes additæ, cura & studio P. Iacobi Goar .., Parisiis, E Typographia Regia, 1652, [40], 528, 88, [22] p., 45 cm.



No. 17 『年代記』(Chronographia/ Χρονογραφία)

・原著者 セオファニス(Theophanes/ Θεοφανης, 760 頃-817/8)

聖人、「聖証者」。高級軍人の子息として生まれ、官職に就くが間もなく修道生活に入る。イコノクラスム（聖像破壊）運動の嵐の中でイコン崇拝擁護の立場を貫き、そのために追放に遭い客死。

・（著作紹介）世界年代記の最も重要な傑作。前時代のゲオルギオス・シンゲロスによる同名の著作の続編で、285-813 年間の事件を記録。イコン崇拝擁護の立場を明確にしている。残存記録の乏しい7-8 世紀ビザンツ史の最重要史料である。870 年代にラテン語訳、10-11 世紀にスラヴ語訳が作られた。また、作者不明の『続セオファニス』なる本書の続編も作られている。展示の図書はヤコブス・ゴアルにより編纂。セオファニスの他にレオン・グラマティコス（「学者」）の著作を収録。

No. 17 **Theophanes; Leon Grammatikos**, S. p. n. Theophanis Chronographia, Leonis grammatici Vitae recentiorvm impp. R. p. Iacobvs Goar ... latine reddidit. Theophanem notis illustravit, varias lectiones multiplices codd. collatione adiecit, Parisiis[Paris], E. Typographia regia, 1655, xviii, 676, lx p., 43cm.



No. 18 『年代記』 (Chronike syngraphe/ Χρονικη συγγραφη)

・原著者 ゲオルギオス・アクロポリティス (Georgios Akropolites/ Γεωργιος Ακροπολιτης, 1217-82)

コンスタンティノーブル出身でニケアにて学んだ文人・官僚。セオドロス2世ラスカリス帝(1254-58)の家庭教師となり、同帝の許で税務長官などを歴任。ミハイル8世パレオロゴス帝(1259-82)による帝国復興後は首都高等学院(大学)の長となり哲学・修辞学・幾何学の教鞭を執る。リヨン教会会議(1274)に派遣され、東西教会合同を進める。『年代記』は多数ある彼の著作の中でも主著であり、1203-61年の事件を扱い、ミハイル8世の帝国復興を讃えている。その記録は正確で後の歴史家によっても数多く引用された。展示の書籍はレオン・アラティオスが編集を担当、他にヨイル(Ioel/ Ιωηλ)、ヨアニス・カナノス(Ioannes Kananos/ Ιωαννης Κανανος)の著作を収録。また1649年に刊行されたドウカス(Doukas/ Δουκας)の著作『ビザンツ史』(Historia Byzantina)が合本されている。

(編者) レオン・アラティオス (Leon Allatios/ Λεων Αλλατιος, 1586-1669)

帰一教会派(1054年に相互破門によりローマ・カトリック教会と断交した東方正教会の中で、独自にローマに帰順した一派)のギリシア人。主にイタリアで活動し西方知識人のギリシア語教師となった他、数多くのビザンツ著作の校訂とラテン語訳を行う。

No. 18 Georgios Akropolites, *megas logothetes*; Ioel; Ioannes Kananos, Γεωργίου του Ακροπολίτου του μεγάλου λογοθέτου Χρονικη συγγραφη = Georgii Acropolitæ magni logothetæ Historia, Ioelis Chronographia compendiaria, & Ioannis Canani Narratio de bello CP. [i. e. Constantinopolitano] Lenone Allatio interprete, cum eiusdem notis & Theodori Dovzæ observationibus. Accessit diatriba de Georgiorvm scriptis, Parisiis[Paris], E Typographia regia, 1651; Doukas, Duca, Michaelis Duca Nepotis historia Byzantina, Res imperio Græcorum gestas complectens a Joanne Palæologo i ad Mehemetem II, E Bibliotheca Regia primum in lucem edita, versione Latina et notis illustrata i studio et opera Ismaelis Bullialdi, Parisiis[Paris], E Typographia regia, 1649, 2 v. in 1.

(4) 『ビザンツ史家全集ヴェネツィア叢書』(通称「ヴェネツィア版」/ La byzantine de Venise, 1729-38, 34 vols.)



「パリ版」は刊行後間もなく希少となり再版の要求が生まれると、これに応じてヴェネツィアで短期間に再版・増補版が完成され出版された。これが「ヴェネツィア版」であり、巻数は同じ(全34巻)ながらヨアニス・マララス、ゲネシオス及びいくつかの短編が加わっているが、活字の誤植が多数にのぼるという問題点が指摘された。使用されている紙の質も王立印刷所を使用出来たパリ版に比べて若干劣悪である。

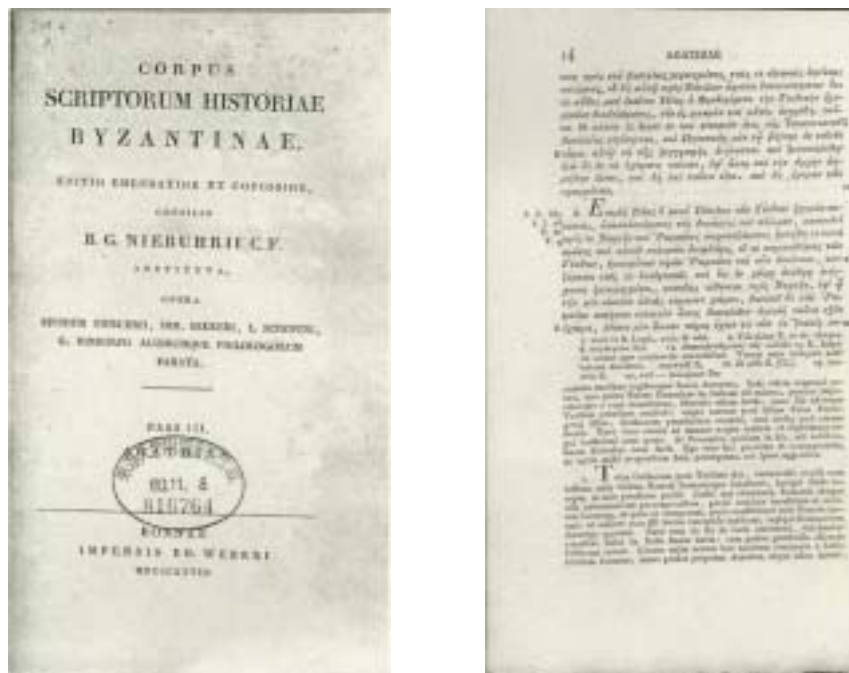
No. 19 『年代記』(Chronikai/ Χρονικαί)

・原著者 ヨアニス・キナモス(Ioannes Kinnamos/ Ιωαννης Κινναμος, 1143-1185以降)

マヌイル1世コムニノス(1143-80)の皇帝秘書官として帝の遠征に同行。1118-76年までを扱った歴史著作を著す。アンナ・コムニニの続編的性格を持つその内容はマヌイル1世を称賛するものであり、皮肉めいた口調も多いホニアティスとは対照的である。ビザンツ皇帝権の賛美者として当時発展著しい神聖ローマ・ドイツ皇帝権に対しては激しく攻撃している。なお、展示の書籍では『歴史書六巻』(historiarum libri sex)という題が付されており、キナモスの他コンスタンディノス・マナシス『歴史概観』が収められている。

No. 19 **Ioannes Kinnamos; Konstantinos Manasses**, Joannis Cinnami imperatorii grammatici historiarum libri sex: Constantini Manassis Breviarum historicum, Venetiis[Venezia], ex typographia Bartholomaei Javarina, 1729, 238, 165p, 39cm.

(5) Nos. 20-56 『ビザンツ史家全集ボン叢書』(通称「ボン版」/ Corpus Scriptorum Historiae Byzantinae, Bonnae, 1828-78, 49vols.)



パリ版刊行開始から約二世紀を経てニーブールの主唱により新たに刊行が開始された全集。彼はこの全集を「文献学と歴史学にとって特筆すべき、我が(ドイツ)国民にとって光輝ある事業」となる事を念願し自らアガシアスの校訂を担当してその先鞭をつけたが、インマヌエル・ベッカー他の共同編集者の非協力によりパリ版を上回る事もない低調な結果に終わった。しかしながら同全集はパリ版以降二世紀間の印刷技術や流通の長足の進歩により広く普及し、今日に至るまで主要なビザンツ史書全集としての役割を果たしてきた。その為、絶版後も写真複製版が製作されて広まっている。

No. 20 アガシアス『ユスティニアヌス帝の統治について』(原著者・著作は18ページ参照)

・編者 バルトルド・ゲオルク・ニーブール(Barthold Georg Niebuhr, 1776-1831)

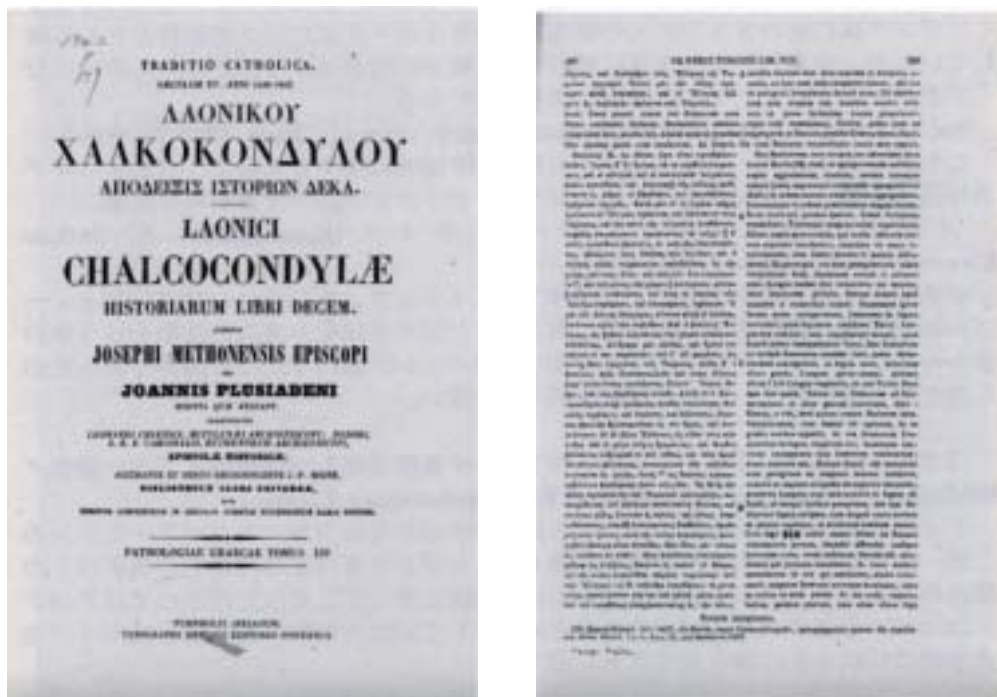
ボン大学教授。プロイセン王国財務官職にあったが宰相K・A・フォン・ハルデンベルク侯との意見相違により辞任。主著『ローマ史』(3巻)に於いて批判的方法を開発、近代的歴史学の祖と言われる。彼の方法論は『世界史』の著者レオポルト・フォン・ランケ(1795-1886)によって確立普及された。

「裏話」(2).....校訂作業の実情

「アウグスト・ハイゼンベルクが語ったとして伝えられているところによれば、ハイゼンベルクがイマヌエル・ベッカーの許に伺候した時、後者は食事が済んでソファに寝そべり、葉巻を口にしながら時折ある古版本に訂正をほどこしているところだったという。こうして訂正をほどこされた版本が、続いて、いわゆるボン版編纂のため印刷所に送られたのである。」

No. 20 Agathias, Agathiae Myrinaei historiarum libri quinque cum versione latina et annotationibus bon. vulcanii, accedunt, Agathiae recensuit, Bartholdus Georgius Niebuhrius, Graeca recensuit, Bonnae, Impensis Ed. Weberi, 1828 (Corpus scriptorum historiae Byzantinae; pars 3), xxxvii, xvi, 419p., 24cm.

(6) Nos. 57-71 『ギリシア教父全集』(通称「ミーニュ版」/ *Patrologiae cursus completus, Serie Græco-Latina*, Paris, 1857-66, 161 vols.+ Indices 2vols.[1912])



ミーニュにより計画・編纂されたキリスト教父著作全集。編者の名を取り通例は「ミーニュ版」と呼ばれる。ギリシア語著作全集とラテン語著作全集の2シリーズがある。元々はタイトルの通り教父（初期キリスト教世界に於いてキリスト教信仰の普及の為に活動した著作家。聖師父とも）の著作を収録するものであったが、宗教著作を超えて幅広く中世のギリシア語・ビザンツ作家著作が収録されている。ただし、未収録のものを除き殆どがボン版の校訂をそのまま収録しており、同版が抱えていた問題点もほぼそのまま踏襲してしまっている。なお、この全集もいくつかの復刻・写真複製版が製作されて広まっている。展示の図書はベルギー・トゥルンホールにて刊行された復刻版であるが、活字の劣化などにより読みにくいというはなはだ実用的な問題も存在している。

No. 70 ラオニコス・ハルココンディリス『歴史陳述』（原著者・解説については14ページ参照）

・編者 ジャック・ポール・ミーニュ (Jacques Paul Migne, 1800-75)

フランスの神学者。オルレアンで神学を学び1824年司祭となったが司教と意見が合わず辞任。1833年パリに出て印刷所設立。『教父全集』『神学者百科事典』等を刊行。1868年火災と普仏戦争で印刷所を失い失意のうちに没した。

No. 70 **Laonikos Chalkokondyles**, Λαονικου Χαλκοκονδυλου Αποδειξεις ιστοριων δεκα = Laonici Chalcocondylæ Historiarum libri decem, accedunt Josephi Methonensis episcopi seu Joannis Plusiadeni scripta quæ exstant, præmittuntur Leonardi Chiensis ... epistolæ historicae, Turnholt, Brepols, [1966] (*Patrologiae cursus completus omnium ss. patrum, doctorum scriptorumque ecclesiasticorum, sive Latinorum, sive Græcorum, accurante J.-P. Migne, Patrologiae Græcæ; tomus 159*)(original edition; Paris, 1966), 1440 columns, 29cm.

(7) No. 72 『中世文庫』 (Μεσαιωνική βιβλιοθήκη, Venezia, 1872-93, 7vols.)

ギリシア人の手になるビザンツ歴史書の出版としては最初のものとなる全集。ビザンツ中期最大の学者の一人ミハイル・プセロスなどを初めて収録。またビザンツ時代だけでなくビザンツ滅亡後のギリシア人の歴史を描いたケサリオス・ダボンデスの著作なども収録しているが、全集としては未完に終わった。なお、展示の図書はオリジナルのものではなくアテネ・グリゴリアディス書店による写真複製版である。

No. 73 『ギリシア史の記録』 (Μνημεία της ελληνικής ιστορίας, Paris, 1880-96, 9vols)

こちらはフランク・ヴェネツィア占領下のギリシア地域に関する史料で、ヴェネツィア共和国公文書・元老院議事録など主にラテン語・中世イタリア語の文書史料を収集。

・ 編者 コンスタンディノス・N・ササス (Konstandinos N. Sathas / Κωνσταντίνος Ν. Σάθας, 1842-1914)

中央ギリシア・ガラクシディの出身でパリ、ヴェネツィア、そしてコンスタンティノブル総主教座（当時オスマン帝国に属していた）など国外で研究と出版の活動を行う事が多かった。ギリシア人の手になる最初的全集出版がギリシア国内ではなく海外であったのも独立間もないギリシアの状況を反映していて興味深い。

(8) Nos. 74-87 『トイブナー・ギリシア・ローマ著作文庫』（通称トイブナー叢書 / Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana, Lipsiae）

ドイツにおけるギリシア・ローマ古典著作出版の中心となる全集。ギリシア・ラテンの二部。主として古典作家の著作を収録しているが、ビザンツ作家の作品も古典著作との関連作品を主として若干収録している。現在では絶版となっていたがかつてはアンナ・コムニやヨアニス・ゾナラスなどの著作も収録していた。なお、解説などはドイツ古典学問の伝統を受け継ぎ全てラテン語である。

(9) Nos. 88-94 『フランス大学集成（ビュデ叢書）・ビザンティン集成』（Collection des Universités de France (Budé). Coll. Byzantine, 1926-)

ドイツに於けるトイブナー同様、フランスに於けるギリシア・ローマ古典著作の中心を為す全集。全集の名前にはルネサンス期フランスの人文主義者ギヨーム・ビュデの名前を冠している。全集自体は古典作家の作品であるが、ビザンツ作家の作品を集めた一セクション『ビザンティン集成』がある。アンナ・コムニ、ミハイル・プセロスの歴史書の他、後期ビザンツの学者ディミトリオス・キドニス、ニキフォロス・グリゴラスの書簡撰などを収録している。希（右ページ）仏（左ページ）対訳の形式をとり、ペーパーバック版による廉価の実現と相まって広く同国の一般読者へ拓かれた全集としてトイブナー叢書にはない特色も備えている。なお、同集成は現在『ビザンツ史泉全集』のパリ版を兼ねる事になり、最新刊ではハードカバーに転換している。

(10) Nos. 95-101 『ローブ古典図書』 (Loeb Classical Library, London)

イギリスに於ける古典ギリシア・ローマ著作の全集の一つ。収録作品は殆どが古典古代からローマ時代にかけてのもので、ギリシア文学は緑、ラテン文学は赤の表紙になっている。左ページにギリシア語、右ページに英語の対訳形式。ビザンツ時代の著作としては唯一プロコピオスのものが収録されている。イギリスに於いてはプロコピオスが古代ギリシア・ローマ文学の最後であると位置づけられている事を窺わせる。

(11) Nos. 102-106 『ビザンツ世界』 (Le Monde Byzantin, Paris)

パリにて新たに創刊された全集。主として国際版である『史泉全集』やビュデ版に収められなかった書簡集などの小品集を中心に刊行が行われている。

(1 2) Nos. 107-135 『ビザンツ史泉全集』(Corpus Fontium Historiae Byzantinae, 1967-)



各国で展開される個別の公刊作業に対し、ボン版以来のビザンツ歴史書の全般的な叢書の発刊が1961年のビザンツ国際学会(旧ユーゴスラヴィア・オフリドにて開催)にて提案された。それを具現化したものがこの『ビザンツ史泉全集』で、米(ワシントン)・独(ベルリン)・奥(ウィーン)・仏(パリ)・ベルギー(ブリュッセル)・伊(ローマ)・希(アテネ及びセサロニキ)の七カ国八都市にて現在も進行中である。現存する全ての写本を使用して校訂にあたる事、また英・仏・独・伊いずれかの本文現代語訳と解説、固有名詞及びその他の単語の索引が付けられるという点で統一された。ただし体裁は各巻様々で、対訳形式のものもあればテキストと翻訳が別冊で刊行されたものもある。

No. 107 コンスタンディノス7世ポルフィロゲニトス『帝国の統治について(息子ロマノスに宛てて)』(De administrando imperio/ Προς τον ιδιον υιον Ρωμανον)

全集の記念すべき第一号。ジューラ・モラフチクが校訂を、ロミリー・ジェンキンスが英訳を担当。原著者については18ページ参照。この著作は、コンスタンディノス7世が息子ロマノス2世に宛てて書いた帝王教育書の一つで、帝国周辺の諸民族(ゲルマン、スラヴ、アラブ他)について紹介し、それに対してどのような外交戦略をとるべきかを説く。

No. 107 **Konstantinos VII. Porphyrogenetos**, Constantine Porphyrogenitus, De administrando imperio, Greek text edited by Gyula Moravcsik, English translation by Romilly James Heald Jenkins, New ed. Washington D. C., Dumbarton Oaks Center for Byzantine Studies, 1967 printgng (Corpus fontium historiae Byzantinae; v. 1; Series Washigtoniensis)(Dumbarton Oaks texts; 1), ix, 341p., 24cm.

3．近代ビザンツ史学の確立と発展

歴史書など原史料の出版によりビザンツ史に対する知識が深まってくると、それを基にしてビザンツ史を独自の歴史対象として捉える試みが生まれ、進展した。「ビザンツ学」の始まりである。しかし、ビザンツ歴史書出版の時代は啓蒙主義全盛の時代であり、エドワード・ギボンの『ローマ帝国衰亡史』のように、政教一致の東方の国ビザンツはあくまで「陰謀」など後ろ暗いイメージを持って捉えられる傾向があった。19世紀になってニープール、ランケらによって厳密な史料批判に基づく近代科学の一つとしての歴史学が成立し、ビザンツ史に対する解釈も次第に変化を見るようになった。各国で研究が開始され飛躍を見たビザンツ学は、第二次世界大戦後に一つの転機を迎える。ソ連を初めとする社会主義諸国の研究者達はマルクス主義歴史学の立場でビザンツ史の解釈を試み、そこに「古代・奴隷制 中世・封建制」という全人類共通の歴史的潮流を見出そうとした。こうした解釈は「西側」諸国の研究者との間に「ビザンツ封建制論争」なる一大議論を巻き起こしたが、それも1970年代に入ると下火となり、殆ど顧みられなくなった。現在、新たなビザンツ史像の確立が諸国の研究者により模索されている。日本では第二次世界大戦後に本格的なビザンツ学が始められ、欧米の諸研究が積極的に取り入れられ、90年代に本格的な概説書が刊行されているが、今なおその一般的認知にはほど遠い。日本におけるビザンツ学の課題は歴史全体に於けるビザンツ史の認知と日本人独自の視点を交えたビザンツ史像の確立であろう。

以下の展示図書は各国のビザンツ学確立に貢献した研究者とその主要著作である。

No. 136 『ビザンツ史』(Historia Byzantina)(1680)

・著者 シャルル・デュフレズン・デュ・カンジュ卿(Charles Dufresne sieur Du Cange, 1610-88)

アミアン出身のフランス貴族でビザンツ学の確立者。1670年代以降、ビザンツ史家全集パリ版の主要編纂者として多くのビザンツ著作の校訂と注釈を行う。歴史学、文献学、系譜学、地誌学、古銭学の領域でも成果を上げた。古代ギリシア語、中世ギリシア語それぞれの百科事典や中世・近世ラテン語辞典を編纂。

・(著作紹介)校訂された史料をもとに本格的に書かれた最初のビザンツ史研究書。ビザンツ歴代の王朝及び有力者の家系、及び周辺のスラヴ・トルコ諸王朝の系譜をまとめた『ビザンツ皇族一覧』(Familiae Byzantinae Augustae)及び『コンスタンティノーブル・キリスト教世界』(Constantinopolis Christiana)の二部からなる浩瀚な書。展示の図書は原本ではなく1964年にブリュッセルにて刊行された写真複製版。

No. 136 **Carolus Du Fresne Dominus Du Cange**, *Historia Byzantina duplici commentario illustrata, prior familias ac stemmata imperatorum Constantinopolitanorum, cum eorundem Augustorum nomismatibus, & aliquot iconibus: praeterea familias Dalmaticas & Turcicas complectitur, alter descriptionem urbis Constantinopolitanæ, qualis extitit sub imperatoribus Christianis*, Bruxelles, Culture et Civilisation, 1964(Reprint of original published: Paris, L. Billaine, 1680), 4 v. in 1, ill. (some folded), 41cm.

No. 137 『東帝国或いはコンスタンティノポリスの古代史』(Imperium Orientale sive antiquitates Constantinopolitanæ in quatuor partes distributæ ...)(1711)

・著者 アンセルモ・バンドゥーリ(Anselmo Banduri)

デュ・カンジュと並ぶパリ版の主要編纂者。

・(著作紹介)パリ版の校訂作業過程で得られた知識を再構成したビザンツ史の概説・解説書。年代順の事件概説、コンスタンティノーブルの地誌、中世ギリシア語の語彙などを含む他、若干の史料校訂を収録。二巻本。

No. 137 **Anselmus Banduri**, *Imperium Orientale sive antiquitates Constantinopolitanæ in*

quatuor partes distributæ ... , Parisiis, Typis & sumptibus Joannis Baptistæ Coignard, 1711, 2 v., ill., folded maps, plans, 44 cm.

No. 138 『中世に於けるモレア半島の歴史』(1830-36)

・著者 ヤコブ・フィリップ・ファルメライヤー(Jakob Philipp Fallmerayer, 1790-1861)

ティロル(現イタリア北部)地方出身のドイツ人旅行家にして歴史家。オーストリア・ザルツブルクにて学んだ後対ナポレオン戦争に参加。戦後ヴェネツィア・ヴィーンなどで研究活動を行い『トラペズス帝国史』(1827)を出版、評価を得る。バイエルン王立科学アカデミーの会員に選ばれミュンヘン大学に職を得るがその自由主義的信条から当局により何度か追放の憂き目に遭う。1830年代、1840年代には東地中海地域に滞在。

・(著作紹介)近代ギリシア国家独立が国際的に承認されたまさにその年に刊行されセンセーションを呼んだ著作。オスマン帝国からの独立を目指すギリシア人は、自らをそれまでの「ローマ人・正教キリスト教徒」に代えて「古代ギリシア人の子孫たるギリシア人」と位置づける事で古代ギリシアへの愛着を示していた西欧諸国民の支持を取り付けようとした。これに対して本書は古代ギリシア人なるものが6-7世紀のスラヴ人の侵入と定住により消滅し、現在ギリシア人と称している者は全てその後にギリシア化されたスラヴ人やアルバニア人の子孫に過ぎないと断じてギリシア人及び親ギリシア派の人々に冷水を浴びせた。当然ながらギリシア人を中心にこれに対する猛烈な反論が展開され、「ギリシア民族史」の確立を促進する逆説的な結果も生み出した。「中立的・実証主義的な科学としての歴史」とナショナリズムの衝突の一例と言えるが、現在ではその学説の極端さがいくつもの研究によって修正されている。展示の書籍は1830年と1836年に刊行された二部作を一巻に集約した改訂版のオリジナルである。

No. 138 **Jakob Philipp Fallmerayer**, Geschichte der Halbinsel Morea während des Mittelalters, ein historischer Versuch, Stuttgart, J. G. Cotta, 1830-1836, 2 v. in 1, 20 cm.

No. 139 『10世紀コンスタンディノス・ポルフィロゲニトスのギリシア帝国』(1870)

・著者 アルフレ・ニコラ・ランボー(Alfred Nicolas Rambaud, 1842-1905)

フランス・近代ビザンツ史学の実質的創設者。1881年パリ大教授、1896-98年公共教育相・美術相に就任。フランス史家ラヴィスとの共著で『歴史概説』。彼自身は間もなくその歴史的関心をロシア史に転じたが、シュルンベルジュらその学統を継ぐ数多くの弟子を育てている。

・(著作紹介)ビザンツ中期の学者皇帝コンスタンディノス7世の治世を描いたランボーのビザンツ代表著作。ニューヨーク・パート・フランクリン書店の「研究と史料著作全集」の一つとして刊行された(オリジナルではなく同書店による復刻本)。

No. 139 **Alfred Rambaud**, L'Empire Grec au dixième siècle Constantin Porphyrogète, New York, Burt Franklin (Burt Franklin research and source worksseries; no. 42)(Originally published in Paris, 1870), xvi, 544p., 24cm.

No. 140 『コンスタンティノーブル陥落 第4回十字軍史』(1885)

No. 141 『ギリシア帝国の崩壊とトルコ人によるコンスタンティノーブル占領の物語』(1903)

・著者 エドウィン・ピアース卿(Sir Edwin Pears, 1835-1915)

英国出身。戦争特派員。バルカン戦争(1912-13)などの取材にあたる。ギリシアをはじめとするバルカン諸国に造詣が深く、バルカン戦争の回想録『コンスタンティノーブルの四

十年』(Fourty years of Constantinople)はバルカン現代史の重要史料である。

・(著作紹介) ビザンツ史に於ける二度のカタストロフィー、1204 年の第 4 回十字軍、1453 年のオスマン帝国によるコンスタンティノーブル占領についてそれぞれ同一著者により書き下ろされた著作。歴史上の悲劇と言われるそれぞれの事件について、初めて学術的な立場から専門に書き上げられた労作。展示の書籍は共にオリジナル。復刻本も刊行されている。

No. 140 **Edwin Pears(sir)**, The fall of Constantinople, being the story of the Fourth Crusade, London, Longmans, Green and Co., 1885, xvi, 413 p., 23 cm.

No. 141 **Edwin Pears(sir)**, The destruction of the Greek empire and the story of the capture of Constantinople by the Turks, with maps and illustrations, London; New York; and Bombay, Longmans, Green, and co., 1903, xxiv p., 1 l., 476 p., 4 pl. (incl. 2 port.) maps (2 fold.), 23 cm.

No. 142 『ビザンツ文学史』(1891)

・著者 **カール・クルムバッハ(Karl Krumbacher, 1854-1909)**

ドイツに於ける体系的なビザンツ研究の創始者。本書はその研究活動の中心を為す主著。彼のもう一つの功績は史上初のビザンツ学専門学術雑誌『ビザンツ学雑誌』(Byzantische Zeitschrift)の創刊(1892)である。

・(著作紹介) ビザンツに於ける知的活動の所産として生み出された文学作品及びその著者についての網羅的な著作。「デュ・カンジュ時代以後のビザンツ研究史に於いて、ビザンツ研究者の博学と労力が打ち立てた最も偉大な記念碑」と評価され、今なおビザンツ研究を志す者にとっては重要な書である。なお、展示の書籍はオリジナルのものではなく 1970 年にニューヨークにて出版された復刻本である。

No. 142 **Karl Krumbacher**, Geschichte der byzantinischen, Litteratur von Justinian bis zum Ende des Oströmischen Reiches, 527-1453 , 2. Aufl., New York : B. Franklin, 1970 (Burt Franklin bibliography and reference series; 13.)(Byzantine series; 27)(original edition; München, 1897, Handbuch der klassischen Altertums-Wissenschaft; v. 9, pt. 1), 2 v. (xx, 1193 p.), 24 cm.

No. 143 『コンスタンディノス、最後のギリシア皇帝』(1892)

・著者 **チェドミル・ミヤトヴィッチ(Cedomilj Mijatovic, 1842-1932)**

セルビアの外交官。駐英大使を務める。英語でビザンツ・セルビア関連の著作を著す。

・(著作紹介) ビザンツ最後の皇帝コンスタンディノス 11 世パレオロゴスについての最初の伝記。コンスタンディノスの皇帝即位からコンスタンティノーブルの陥落までを描く。当時のセルビア・ロマン派史学の一つの成果で、ギリシア王子コンスタンディノス(後に王、同 1 世 1913-17, 1920-22)に捧げられた。

No. 143 **Cedomilj Mijatovic**, Constantine, the last emperor of the Greeks, or, The conquest of Constantinople by the Turks (A.D. 1453) after the latest historical researches, London, S. Low, Marston & company limited, 1892, xiv, 239 p., 5 pl., 20 cm.

No. 144 『10 世紀末のビザンツ叙事詩的事件』(1895-1905)

・著者 **ギュスターヴ・レオン・シュルンベルグ(Gustave Léon Schlumberger, 1844-1928)**

ランボーの弟子の筆頭格。ビザンツ古銭学、印璽学の分野で大きな成果を上げ、この分野でフランスをビザンツ学の主導的立場にまで高めた。その成果が主著『ビザンツ帝国印璽学』(1844)である。

・(著作紹介) ビザンツ中期の最盛期、10 世紀後半に登場した将軍皇帝達の事績を描いた大著。中期ビザンツ史の基本文献でありまた教養書である。各国語に翻訳されている。

No. 144 **Gustave Léon Schlumberger**, *L'épopée byzantin à la fin du dixième siècle ...* [1. ptie.] Jean Tzimisces. Les jeunes années de Basile II, le tueur de Bulgares (969-989), Paris, Hachette & cie, 1896-1905, 3 v., fronts.(v. 1, map), illus.(incl. facsim.) plates, map, fold. facsim., 29 cm.

No. 145 『ビザンツ領アフリカ ビザンツ帝国のアフリカ支配(533-709)』(1896)

・著者 シャルル・ディール(Charles Diehl, 1859-1944)

シュルンベルジュと共にランボーの学統を継ぐフランスの研究者。政治史、制度史、美術史などビザンツ学の各分野に造詣が深く、研究書・論文と共に多くの流麗な筆致のエッセイを残す。

・(著作紹介) ユスティニアヌス帝の征服からアラブ・イスラーム勢力による完全な消滅までの約二世紀間にわたるビザンツの北アフリカ支配を描いた大作。詳細な叙述、図版も多用され著者の博識と広範な視野が窺える著作である。

No. 145 **Charles Diehl**, *L'Afrique byzantine: histoire de la domination byzantine en Afrique (533-709)*, ouvrage couronné par l'Académie des inscriptions et belles-lettres, Paris, E. Leroux, 1896 (Description de l'Afrique du Nord: entreprise par ordre de M. le ministre de l'instruction publique et des beaux-arts), 644 p., illus. (incl. plans), XI pl. (2 fold., incl. front) 2 fold.maps, 25 cm.

No. 146 『9 世紀の帝国行政制度。付・フィロセオス官職表の改訂テキスト』(1911)

・著者 ジョン・バグネル・ビュアリー(John Bagnell Bury, 1861-1927)

アイルランド出身でケンブリッジ大近代史教授。英国近代ビザンツ学の確立者。『東ローマ帝国史』(1912)、『後期ローマ帝国史』(二巻本, 1913)など概説書を刊行。ビザンツ史のみならず広くローマ史や中世ヨーロッパ史への造詣も深く、日本ではエドワード・ギボンの『ローマ帝国衰亡史』の校訂・注釈者として知られるが、彼の作業によりこの啓蒙的著作は専門書としての価値を付加された。またケンブリッジ大学により企画された『ケンブリッジ中世史』旧版の編集総責任者でもある。なお、彼の姓名については「バリー」「ベリー」など異読も多数。

・(著作紹介) ビザンツ制度史研究を確立した英国ビザンツ学黎明期の著作。主要史料であるビザンツ 9 世紀の文官フィロセオスの『官職表』(*Κλητρολογιον*)の原典を付している。『英国アカデミー論文集』(1911)からの抜粋編纂で同年に刊行。

No. 146 **John B. Bury**, *The imperial administrative system in the ninth century, with a revised text of the Kletorologion of Philotheos*, New York, Burt Franklin, 1911[originally published as: *The British Academy Supplemental Papers I* (1911)], 179 p.

No. 147 『無名の陳述年代記及びアテネ年代記』(Ecthesis chronica and chronicon Athenarum)

・編纂者 スピリドン・パヴル・ランブロス(Spyridon Pavlou Lambros/ Σπυρίδων

Παύλου Λάμπρος, 1851-1919)

アテネ大教授。ギリシアに於ける近代ビザンツ学確立の第一人者。文献学を得意とし多数の写本を調査・校訂を施して公刊。その成果である『パレオロゴス王朝・ペロポネソス関連文書集』(1912-30)は今なお重要なビザンツ公文書集の一つである。西欧の進んだビザンツ学研究をギリシア語に翻訳し紹介する活動なども展開しギリシアに於けるビザンツ学の蓄積に尽力。政治にも参加し第一次世界大戦後の混乱期に首相(1916-17)にも就任するが罷免・追放・暗殺される。没後数多くの遺稿が出版された。

・(著作紹介) 17世紀に書かれた作者不明の年代記。1425年のマヌイル2世・パレオロゴス帝の死去から1453年のコンスタンティノーブル陥落・ビザンツ帝国滅亡を経て17世紀に至るオスマン帝国の歴史を描く。多数の異本がある。

・(メモ) 近代ギリシアは古代ギリシアとの結びつきを強調した為(30ページ、ファルメライヤーの項参照)、その中間にあるビザンツ史は寧ろ否定的に捉えられていた。その後ギリシア国民史の確立により古代と近代を結びつける存在として「中世ギリシア=ビザンツ」が見直されるとギリシアでもビザンツ学の確立が要請された。ランブ罗斯はこうした時代の要請に応えて登場した研究者の一人である。

No. 147 **Spyridon Pavlou Lambros(ed.)**, *Ecthesis chronica and Chronicon Athenarum*, edited with critical notes and indices, 1st AMS ed., New York, AMS Press, 1979(Reprint of the 1902 ed. published by Methuen, London, in series: Byzantine texts), ix, 112 p., 23 cm.

No. 148 『ビザンツ帝国史』(1913)

・著者 フェードル・イワーノヴィッチ・ウスペンスキー(Fedor Ivanovich Uspenskij/Федор Иванович Успенский, 1845-1928)

いち早く1894年に『ビザンツ学紀要』(Vizantinskij Vremennik)を創刊したヴァシーリー・G・ヴァシリエフスキー(Vasilij G. Vasiljevskij)と共にロシアの近代ビザンツ学を確立。ヴァシリエフスキーの死後ロシア・ビザンツ学界を主導。特にビザンツとスラヴ諸国との関係史に於いて多大な貢献。

・(著作紹介) ロシアに於けるビザンツ学の確立を示した通史。本書は三巻本の第一巻にあたり、帝政ロシア末期にサンクト・ペテルブルクにて刊行されたオリジナルである。第二巻は共産革命後改名されたレニングラードにて1927年に、第三巻は著者の死後1947年にモスクワで刊行された。

No. 148 **Ф.И. Успенскаго[Fedor Ivanovich Uspenskij]**, *Исторія Византийской имперіи*, С. Петербургъ, Брокгаузъ-Ефронъ, 1913[-1948], v., ill., maps, 31 cm.

Nos. 149-152 『ビザンツ国家史』(1948)

・著者 ゲオルギ・オストログolsキー(Georgij Ostrogorskij/Георгий Острогорский, 1902-73)

ロシア・サンクト・ペテルブルク生まれ。革命の為ドイツに移住。ナチス政権誕生によりユーゴスラヴィアに移住し、1933年以降ベオグラード大学教授。マルクス主義の発展段階理論を取り入れて「ビザンツ社会経済史」を確立。国家と農民(生産者)との関係からビザンツ帝国にも中世西欧同様の社会が存在していたとする「ビザンツ封建制」やビザンツ行政の特徴であるセマ(テマ, 軍政区)制度について独自の学説を提示し、20世紀のビザンツ史学を代表する歴史家となる。

・(著作紹介) 著者自身と並び20世紀ビザンツ史学を代表する不朽の名著。一千年にわたるビザンツ史を三時代に区分し詳細に叙述した専門的概説書で、全てのビザンツ研究者にとって必須の入門書である。1948年にドイツ語で出版され、以後世界各国語(セルビア・クロアチア語、フランス語、英語、スロヴェニア語、ポーランド語、イタリア語、ギリシ

ア語)に翻訳され、2001年には遂に邦訳が完成された。本展示ではミュンヘンで『中世史学叢書』の第12巻として再刊されたドイツ語改訂版(1963)、オックスフォードにて刊行された英訳書版(1958)、セルビア・クロアチア語版(1969)、及び和田廣氏(筑波大教授 当時)により訳された邦訳版(邦題『ビザンツ帝国史』2001)を展示している。

No. 149 **Georg Ostrogorsky[Georgij Ostrogorskij]**, Geschichte des byzantinischen Staates, 3. durchgearbeitete Aufl., München, C.H. Beck, 1963- (Handbuch der Altertumswissenschaft, 12. Abt.: Byzantinisches Handbuch; 1. T., 2. Bd.), xxi, 514 p., 6 leaves of plates, ill., geneal. tables, col. maps, 25 cm.

No. 150 **George Ostrogorsky[Georgij Ostrogorskij]**, History of the Byzantine state, translated from the German by Joan Hussey, Oxford, Basil Blackwell, 1956, xxvii, 548 p, ill., maps, 24 cm.

No. 151 **Георгије Острогорски[Georgij Ostrogorskij]**, Историја Византије, Београд, Просвета, 1969(Сабрана дела Георгја Остроког Књ. 6а), 582 p., [27] leaves of plates, ill., col. Maps, 22 cm.

No. 152 **ゲオルグ・オストロゴルスキー**著, 和田廣訳, 『ビザンツ帝国史』, 東京, 恒文社, 2001.3, xxxii, 752, lxxxv p, maps, 22cm.

No. 153 『ビザンツ帝国の教会・神学文学』(1959)

・著者 **ハンス・ゲオルク・ベック**(Hans Georg Beck, 1910-99)

オストロゴルスキーと並び20世紀を代表するビザンツ学者。ミュンヘン大教授。ビザンツ神学、文学、国制史を主として研究、多数の著作・論文を残す。

・(著作紹介) 現在最良のビザンツ文献概説の一つ。主として神学論争の推移を軸に各時代の著作家とその作品、思想を詳述。

No. 153 **Hans Georg Beck**, Kirche und theologische Literatur im Byzantinischen Reich, München C. H. Beck, 1959 (Handbuch der Altertumswissenschaft, 12. Abt.: Byzantinisches Handbuch, 2. T., 1. Bd.), 835 p.

No. 154 『ビザンツ帝国史』(1999)

・著者 **尚樹啓太郎**(Keitaro Shojyu, 1927-)

我が国ビザンツ史学の黎明期を担った研究者の一人。東京大学、コレージュ・ド・フランスなどに学び、長く東海大学及び同大学院にてビザンツ史・西洋史の講座を担当し、付属図書館長や副学長などの要職を務めた。また国内では初の専門研究会「バルカン・小アジア研究会」を設立。文献史学とフィールド・ワークの総合を目指し、1975年から数回にわたり南ギリシア・ラコニア地方の史跡調査を行う。クールセル、アルヴェレールなどフランス人研究者著作の翻訳の他、ビザンツ関連の史跡紀行文などを刊行。現在東海大学名誉教授。

・(著作紹介) 日本人ビザンツ研究者による初のビザンツ史通説・概説書。オストロゴルスキー他世界のビザンツ史学の動向・通説を踏まえつつ、明治以降日本が範とした「西洋」文明に相対する存在としてのビザンツ史に着目した、日本人独自の視点からの解釈をも示す。政治史だけでなく社会・経済・文化史などにわたる多面的な叙述と、日本では初の試みとなる中世ギリシア語に基づくカナ表記などの特色を持つ。

No. 154 **尚樹啓太郎**, 『ビザンツ帝国史』, 東京, 東海大学出版会, 1999, XLVIII, 1227 頁, 22cm.

付記

(1) 図書の展示番号は展覧会場に於ける陳列番号と一致するが、陳列の順序は必ずしも番号順ではない。

(2) 各図書のデータは東海大学附属図書館提供による。ただし若干の修正・訂正を加えてある。図書書誌は各図書解説の末尾に付し、その記載順序は原則として陳列番号、原著者、題名、編纂者・翻訳者、出版地、出版社、出版年、ページ数、寸法とした。

(3) 寸法は縦サイズのみ記載である。

(4) 執筆者は金原、平野の分担作業である。特に執筆者の記載のないものは全て平野が担当した。

(5) 使用した写真は下記提供者指定のもの以外は東海大学附属図書館並びに平野撮影のものである。

(6) 本文中のビザンツ・ギリシア語表記について

(a) カナ読みは全て中世ギリシア語のそれに従った。その規範となったものは尚樹啓太郎著『ビザンツ帝国史』(東海大学出版会, 1999年)であるが若干の変更を加えてある。

(b) ギリシア文字は都合によりアクセント記号を省略した。

(c) ラテン・アルファベットへの転写は次の要領である。[]内は発音

η= e=[i] ω= o=[o] / 氣息記号(·)は転写していない。

・二重母音は一字ずつ転写した。

・βは中世ギリシア語の発音では[v]であるが本パンフレットではbとした。

・αυ, ευは同様にそれぞれ場合により af/ av, ef/ ev となるがどちらも au, eu とした。

(d) 近代ギリシア人名についてはモノトニコ(単一記号)形式でギリシア文字にアクセントを付してある。

(写真提供)

・講談社(5頁左 - 『週間ユネスコ世界遺産 No. 15』(2001/2/8), 19頁より; 11頁右 - 同、6頁より)

・栗原可奈子(15頁左)

* 執筆者紹介

・金原保夫(東海大学文学部教授)

・平野智洋(東海大学研修員・女子美術大学非常勤講師)

(表紙写真)「書を手にする聖グリゴリオス(左)と聖アンドレアス(右)」(ミストラス・聖ニコラオス聖堂壁画より)

主催：東海大学文学部歴史学科西洋史専攻・附属図書館

発行日 2005 年 4 月 1 日

印 刷 教育支援センター印刷業務課

発行所 東海大学附属図書館